|  |
| --- |
| 鳥取県における子ども食堂支援の現状と課題  ～学生ボランティアへの支援方法の検討～  〇発表者名　　　鳥取短期大学幼児教育保育学科・学生　山脇 悠人  　　　　　　　　　共同研究者名　鳥取短期大学幼児教育保育学科・学生　安藤 侑奈  　　　　　　　　　　　 　鳥取短期大学・准教授　　　　　　　　青木 淳英 |

１．問題提起

新型コロナ禍によって活動を休止していた「子ども食堂（地域食堂）」（以下、食堂）が再開しはじめていると耳にした。そこで鳥取県内の食堂の現状と課題を調査し、保育学生である私たちに出来ることを考察したいと考えた。

２．目的

本研究の目的は、食堂及び食堂運営を支援する団体（以下、中間支援団体）への調査から食堂の現状と課題を明らかにし、私たち学生がこれらの活動に関わるための方策を検討することにある。また、保育学生が食堂の活動に関わる意義も考察したい。

３．方法

本研究の目的を達成するため、文献・資料収集、現地調査、関係機関・団体への聞き取り調査によって研究を進めた。2024年４月から着手し、県内全食堂の情報を収集、調査に赴く食堂を選定し、聞き取り内容を検討した。５月から８月にかけて食堂や中間支援団体への調査を行った。11月以降は保育学生が食堂に関わる意義について考察を深めた。

（１）中間支援団体の役割と食堂の現状

鳥取県内には中間支援団体が２つある。１つは主に県東部をカバーする「麒麟のまち地域食堂ネットワーク」（以下、「麒麟のまち」）、もう１つは全県をカバーする「とっとり子どもの居場所ネットワーク“えんたく”」（以下、「えんたく」）である。

1. 麒麟のまち地域食堂ネットワーク

「麒麟のまち」は、2017年11月に設立された。鳥取県東部から北近畿を中心とした、食堂44箇所、食品会社等62の支援団体、行政（鳥取市）の三者で構成されている（事務局：鳥取市）。活動内容は、寄付や提供食材等の共同管理、立上げに関する支援、活動の情報発信などである。「麒麟のまち」への聞き取り調査では、以下のことが明らかになった。コロナ禍によって各食堂で学生ボランティアが途切れてしまった。学生に期待することは、運営や支援のマンパワー（調理の手伝い、子どもへの支援）もあるが、食堂を「学びの場」としても活用してほしい。学生と各食堂とを繋ぐような場やボランティア情報の提供などが必要である。ただし、それは県や市町村などの行政よりも民間団体が担う方が適切ではないか、とのことであった。

②とっとり子どもの居場所ネットワーク“えんたく”

「えんたく」も2017年11月に設立されている。県全域の食堂77箇所、県社会福祉協議会等の支援団体で構成され、県の補助金で運営されている（事務局：ワーカーズコープ・センター事業団　さんいんみらい事業所）。活動内容は、食堂間のネットワークづくり、食材提供・配送のネットワークづくり（主に県中西部）、人材確保のサポートなどである。「えんたく」への聞き取り調査では以下のことがわかった。食堂数は増えてきている（2023年度18箇所増）。ボランティア団体や個人で運営されている食堂が多いが、近年は後継者不在のために閉鎖する食堂も出始めている。コロナ禍のため弁当配食に切り替えた食堂が多く、それまでの「子どもや地域住民の居場所」が「弁当屋」になってしまった。このため、コロナ禍後の運営に悩みを抱えている食堂は多い。学生への期待として、年齢や学年が様々な子どもたちと遊びや勉強などを通して触れ合える場として食堂を利用してもらえたら、とのことであった。

（２）食堂の運営状況と課題

①市民交流施設が運営する食堂

倉吉市福吉児童センター（市民交流施設）の職員が中心となって運営する食堂では、児童養護施設Ａの児童や職員が参加し、児童自らが食材の買い出し、調理して食べるという活動をしていた。状況としては、コロナ禍によって貧困家庭が増加し、本当に困っている子どもたちが食堂を利用できているのかを把握しきれていない。課題は、後継者問題、時間の制約などである。学生に対して、身近な地域の食堂で積極的にボランティアをしてほしい、と話されていた。

②人権福祉センターが運営する食堂

鳥取市西人権福祉センターの職員とボランティア（ふそうささえ愛ネットワークの会）で運営している食堂では、コロナ禍以降は子どもや住民に弁当配食をしている。訪問した日は30食が準備され、小学生10人程度が来ていた。食堂を始めたきっかけは、研修会で食堂の存在を知ったことであった。当初は、おにぎりと味噌汁だけの提供だった。現在、米・野菜の価格が上昇中だが、食材は「麒麟のまち」から提供されているので必要な量を確保できている。ボランティアが少なく職員だけでの運営は困難なため、学生にはボランティアをお願いしたいこと、子どもたちの様子を見てどのような支援が必要なのかも考えてほしい、とのことであった。

**③地域住民が運営する食堂**

家族と地域のボランティアで運営する「子ども食堂 パッチワーク」（倉吉市）は月1回、運営者の自宅で開かれている。代表の沖薫氏によると、「人と人が繋がり合いみんなが楽しい温かい場所を目指し、子どもたちにとって楽しく安心できる場所にしたい。お父さん、お母さんを応援したい」という思いがある。食材は、「えんたく」などからの寄付や自費で賄っている。課題は、他の機関との連携が必要（福祉や学校などの機関との繋がりが薄いため、具体的な支援が難しい）。大人の利用が多く、子どもたちにはお菓子なども配給（おやつクラブ）している。弁当を渡す際の会話からも、相手への気遣い、思いやりの言葉があった。

４．成果・課題

（１）学生が食堂に関わるための課題

①学生への情報提供方法

食堂にボランティアを兼ねた聞き取り調査に赴く際、情報を得ることが難しかった。様々な検索をして、食堂の情報提供をしている「麒麟のまち」「えんたく」を発見できたが、情報へのアクセスのしやすさやわかりやすさ、ボランティアの受入れ情報などがあるとより良いだろう。発表者２名は、指導教員の助言を得ながら、食堂の場所と詳細情報をGoogleマップで閲覧できる「（仮）鳥取県子ども食堂マップ」を作成した。このマップの最良の公表方法の検討が今後の課題のひとつである。

②食堂に関する理解を深める必要性

今回のテーマに取り組むまで、食堂は「子どもの貧困対策」のためにあると思い込んでいた。改めて調べると、「地域交流拠点」（地域の人々の居場所）でもあることがわかった。地域社会において住民同士の繋がりが弱くなり、孤独・孤立対策が社会課題となる中で、食堂の果たす役割について、私たち学生自身が理解を深めたうえで食堂に関わる必要があると強く認識した。

③食堂と学生とのマッチング

ボランティアを希望する際、自分で探し、調べることが基本である。しかし、食堂は多様性に富んでおり、連絡手段を公開していない食堂もある。学生の希望と食堂側のボランティアニーズをマッチングしてもらえるような窓口があれば、学生にとってボランティア参加のハードルが下がると考えられる。

（２）保育学生が食堂に関わる意義

湯浅誠は、「貧困状態の子たちの中には、“黄信号の子”と“赤信号の子”の2種類が存在している」と述べている。“赤信号”の子は、誰もが思い浮かべる深刻な課題を抱えた家庭の子である。“黄信号”はその予備軍と言えるが、当事者にその自覚は無く、周囲からもわかりにくい。「誰が行ってもよい場所」である食堂は、そうした“黄信号”の子どもも行くことができ、言い換えれば、家事・育児負担軽減や虐待予防の機能も担っている場所である。潜在的な子ども・家庭の課題に気づき、支援方策を考え、学ぶ機会としても、私たち保育学生が食堂に関わる意義は大きいと思われる。

今回、聞き取り調査先の方々から、「学生のみなさんも自分たちで食堂を開設してみては？　きっと子どもも保護者も地域の人も喜びますよ」と声をかけられた。私たち学生自身で食堂を開設・運営していけるか、今後、可能性を探っていきたい。